

称号及び氏名	博士（人間科学）	横山 友子
学位授与の日付	2021年3月31日	
論文名	女性の頭髪の清潔について －髪をめぐるジェンダー化された下位文化の形成とその身体化	
論文審査委員	主査	宮脇 幸生
	副査	秋庭 裕
	副査	田間 泰子

論文要旨

本研究では、近代日本の女性の頭髪の清潔について、婦人雑誌を主たる分析対象とし、女性の頭髪の清潔に関する大衆的な言説の構成と変容の過程、およびその動因を社会的に考察する。

日本の近代化のプロセスにおいて、衛生思想が国家により普及されたことが先行研究から明らかになっている。近代日本の女性の頭髪も、このような国家による介入によって影響を受けている。だが他方で国民国家創出のプロセスで、女性には伝統を担いつつ家族の再生産労働を行うというジェンダー規範も課せられた。また大正期以降は、新興中産階級の勃興に伴い、新たな階級文化も浸透した。これらはいずれも、異なった方向から女性の髪型や頭髪にかかわる清潔観に影響を及ぼした。このような影響の交錯する場として、近代日本の女性の頭髪をとらえたときに、女性の頭髪・髪型と清潔観の変遷は、どのようなものとして現れるのか。これを明らかにすることが本研究の課題である。

この課題に取り組むために、本研究は、メディアにおける「女性の頭髪の清潔」について語る言説の変容過程を通事的に記述し、分析することを試みた。対象としたメディアは、明治期中期から大正期にかけて発刊された『婦人衛生雑誌』、明治後期から昭和初期にかけて発刊された『婦人世界』、大正中期から戦後にかけて発刊された『主婦之友』である。

第1章では、近代国家における生権力と衛生思想の普及に関する研究、ナショナリズム論、大正期における新興中産階級の文化と女性に課せられたジェンダー規範の研究、日本における女性の頭髪と髪型の研究、そして雑誌記事分析研究を整理した上で、本研究が取り組

む問いを提示した。

第2章では、『婦人衛生雑誌』に掲載された女性の頭髪と髪型に関する記事を分析した。『婦人衛生雑誌』は、衛生思想の普及を目指した啓蒙活動と、家庭の衛生を守る良妻賢母を育む女子教育を担う雑誌であった。初期の読者層は、教育を受け、雑誌の購買力がある上流階級の女性であり、大正期にはそれが看護師となった。

明治維新から国家統一と軍事力強化に取り組んだ明治政府は、富国強兵政策のもと、衛生思想の普及を目指した。女性の頭髪の管理についても、整髪や洗髪だけではなく、髪型にも強く影響を与え、女性の身体に介入した。このような、ミッシェル・フーコーが「生権力」と呼ぶ国家による力の行使は、『婦人衛生雑誌』の医師による頭髪の疾病に対する対処法や頭髪の管理技術についての啓蒙記事に見ることができる。そこでは不衛生な日本髪が批判され、より簡便な束髪が推奨された。だが他方で、清潔であればどのような髪型をしていてもよいというわけではなかった。女性は日本の伝統を担う者として、男性から評価される美しい黒髪を保つことも求められた。

日清戦争・日露戦争と対外戦争が続き、ナショナリズムが高揚すると、女性の黒髪を賛美する記事が増え、洗髪がしやすく頭髪を衛生的に保つことのできる束髪ではなく、伝統的な日本髪が推奨された。また良妻賢母思想にもとづき、女性に家庭における夫や児童の頭髪の管理を求めるような記事も掲載された。

大正時代になると、初等教育の普及と識字率の上昇、経済発展により、新中産階層が勃興し、都市部では職に就く女性が生まれてきた。これらの女性の間では、より活動しやすい断髪や洋髪が流行し、女性の髪型は日本髷を結う結髪から簡易な束髪へと変化した。それに伴って洗髪習慣も変化した。衛生思想がじょじょに定着し、頭髪の疾病が減少すると、『婦人衛生雑誌』の記事も、これらの髪型に関する記事が増えて行った。

第3章、第4章では、明治後期から昭和初期にかけて『婦人世界』に掲載された頭髪に関する記事と読者相談の内容を検証した。『婦人世界』は新中間層の女性たちを主要な読者とした婦人雑誌であり、とくに大正期には婦人雑誌として日本最大の発行部数を誇っていた。『婦人世界』の記事からは次のことが明らかになった。

明治後期の既婚女性のあいだでは、女性が担う日本の伝統が髪型にも強調され、長く艶やかな黒髪で結う日本髪を維持することが推奨されていた。日本髪を結うことは、伝統的な日本女性の美を担うだけでなく、主婦にとっては良妻賢母としての社会規範を遵守していることを象徴しており、日本女性らしさを強調するものであった。しかし、西洋の近代的な女子教育の影響と、政府が掲げた富国強兵の政策により、母親となる女子の体位・体力向上のため、学校教育に体育が取り入れられた。このことは髪型の流行にも影響し、女生徒の間ではより手入れがしやすく活動がしやすい束髪が普及した。若い女性には、出産・育児にふさわしい丈夫な身体と、それにふさわしい束髪が求められる一方、既婚女性には良妻賢母として日本の伝統を背負い、それにふさわしい日本髪が推奨され、女性には矛盾した状態が内面化された。

大正期に入ると、女生徒時代に束髪を結っていた女性の間では、修了後にも束髪が定着し始めていた。また、資本主義経済の発展によって女性が就くことのできる職業数が増加し、仕事を持つ女性が増加した。これらの職業婦人の間では、より簡潔な手入れでよい洋髪が増え始め、日本髪は正月などの特別な行事のときに結う髪型になっていた。加えて、関東大震災後には、婦人にも動きやすく簡便で質素な束髪や洋髪が推奨された。このように、大正時代には女性の髪型は変化し、インフラストラクチャーの整備が進んだことも合わせ、髪に対する清潔習慣も少しずつ変化した。女性の髪型は、「富国強兵」と「伝統」の護持という、それぞれ異なるベクトルをもつ要因に加え、新興中産階級の新たな流行文化にも影響を受けつつ変化していったのである。

第5章、第6章では、大正期から戦後に渡って『主婦之友』に掲載された頭髪に関する記事の内容を検証し、大正期から戦中期をはさみ、戦後の高度経済成長前までの時代に、当時の代表的なマスメディアが大衆に向けて頭髪をどのように報じ、その記事内容がいかに変遷していったのかを検証し、考察した。

昭和に入り、『婦人世界』にかわって婦人雑誌で最も発行部数の多くなった『主婦之友』は、『婦人世界』よりもより大衆的な女性を読者とした。流行に関する記事や実用記事を多く取り扱い、戦前・戦中・戦後にかけて、多くの女性読者を獲得した。

『主婦之友』では当初、髪形については良妻賢母や日本の伝統を強く謳うのではなく、新たな流行にのっとった洋髪やパーマに関する記事が多く掲載された。この点は、『婦人衛生雑誌』『婦人世界』の大正期の記事と同様の傾向を示している。

しかし、昭和10年代の戦中期に入ると、記事でも戦時色が強調され、銃後髷のような簡易な束髪を推奨する記事が現れた。また、国粹主義的ナショナリズムが盛んになるにつれ、束髪でも「日本女性の長い黒髪」の美しさを保つことが強調された。頭髪の手入れでは、シャンプーが発売されているにも関わらず、記事では布海苔とうどん粉が推奨されていた。洗髪方法に関しても、頭髪を傷めずに、黒く長く真っ直ぐで、多く保つことに重きを置いた方法が紹介された。

終戦後の占領期から高度成長期にさしかかる時期には、女性の参政権が認められ、女性の就労はさらに進み、制服とともに身だしなみにも重点が置かれた。戦前は容易に受け入れられなかった断髪は、ショートカットと呼ばれる流行となり、多くの人々に受け入れられた。また、パーマが流行し、日本髪が日常的に結われることはなくなり、髪形は大きく変化した。

だが戦後の変化は戦中時との断絶ととらえるべきというよりも、大正期から変化していった女性の髪型に対する価値観の変容が、戦中期には抑圧されつつ継続し、戦後それが表面化したと捉えたほうが良いように思われる。戦中期も雑誌では「長い黒髪」の美しさや銃後髷が推奨されたにも関わらず、実際には「代用パーマ」を求める女性は多かった。また髪型と頭髪の管理・洗髪方法が変化するにつれて、「清潔」で「さらっと」した髪を良いとする身体感覚についての記事も現れていた。

この時代に「清潔」とは、明治期の国家が普及させようとした衛生思想にもとづいた疾病

を予防するための状態を指すだけでなく、外観の美しさとも結びついた観念となった。さらにそれだけでなく、油で固められたかつての日本髪にはない、新たな髪に関する身体感覚ともむすびついたものとなっていったと思われる。

初出一覧

序章

本論文が初出

第1章 先行研究の検討

本論文が初出

第2章 黒髪と清潔—明治中期～大正にかけての婦人衛生雑誌から読み解く黒髪の変遷—

横山友子 (2016) 「黒髪と清潔：明治中期～大正にかけての婦人衛生雑誌から読み解く黒髪の変遷」『人間社会学研究集録』11：101-124（査読あり）を加筆・修正

第3章 明治後期～昭和初期にかけての頭髪における記事分析—『婦人世界』から読み解く黒髪の変遷—

横山友子 (2018) 「明治後期～昭和初期にかけての頭髪における記事分析—『婦人世界』から読み解く黒髪の変遷」『人間社会学研究集録』13：171-194（査読あり）を加筆・修正

第4章 『婦人世界』の読者相談から読み解く黒髪の変遷

横山友子 (2019) 「『婦人世界』の読者相談から読み解く黒髪の変遷」『人間社会学研究集録』14：53-74（査読あり）を加筆・修正

第5章 戦前から戦後にかけての頭髪における記事分析—『主婦之友』から読み解く黒髪の変遷—

横山友子 (2020) 「戦前から戦後にかけての頭髪における記事分析—『主婦之友』から読み解く黒髪の変遷—」『人間社会学研究集録』15：93-112（査読あり）を加筆・修正

第6章 戦後から高度成長期に至るまでの頭髪における記事分析—『主婦之友』から読み解く黒髪の変遷—

本論文が初出

終章 まとめと今後の課題

本論文が初出

学位論文審査結果の要旨

本論文について、字数・初出等の論文申請要件を充足していることを確認した。

以下、人間科学専攻の博士論文審査基準（2012年度～2017年度入学生）を参照して結果を述べる。

（1）研究テーマが絞り込まれている。

明治中期から戦後高度経済成長期前までと時代を限定したうえで、女性の頭髪をめぐるメディアの言説の変遷を通して、当時の女性の頭髪と髪型をとらえるという点で、研究テーマははっきりと絞り込まれている。

（2）研究の方法論が明確である。

明治中期から戦後の高度経済成長期前までにかけての、頭髪に関する記事を扱っており、なおかつその時代にもっとも発行部数が多い婦人向け雑誌に掲載された記事のテキスト分析を行っているという点で、方法はきわめて明確である。

（3）研究テーマについての先行研究の調査を十分に行っている。

本研究が先行研究として参照しているのは、近代国家における生権力と衛生思想の普及に関する研究、ナショナリズム論、大正期における新興中産階級の文化と女性に課せられたジェンダー規範の研究、日本における女性の頭髪と髪型の研究、そして雑誌記事分析研究である。本研究は、これらの分野の先行研究を十分に調査し、検討している。

（4）研究の素材となる基礎文献、資料、調査データを十分に吟味している。

本研究は、分析の対象とする3つの婦人雑誌を全巻にわたって綿密に調べ、そこから髪型と頭髪に関する記事をもれなく抽出している。さらにそれぞれの時期における雑誌記事を、数量的な観点および内容の観点から分析し、各時期の雑誌記事の言説を形成している国家生権力・ナショナリズム・中産階級文化の影響を浮き彫りにしている。ここから、本研究がこれらの資料を十分に吟味していることは明らかである。

（5）研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している。

近代日本における女性の頭髪と髪型の変遷に関する研究は少ない。さらに本研究のように、女性の頭髪や髪型、清潔観の変遷を、雑誌の記事分析から、国家生権力・ナショナリズム・中産階級文化の影響の交錯する場所として読み解く試みは、まったく前例のないものである。このように本研究は、テーマへのアプローチ法がきわめて独創的であり、明治中期から戦後高度経済成長期前までの女性の頭髪と髪型・清潔観の変遷に、これらの力がどのように働いたのかを明らかにした点で、新しい知見を打ち出していると言える。

(6) これらの新しい知見を裏付けるための必要にして十分な議論と実証がなされている。

雑誌記事の数量的分析および内容分析は、論理的で説得的である。知見を裏付けるための必要にして十分な議論と実証がなされていると言える。

(7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。

本研究は、近代日本における国家の生権力・ナショナリズム・新興中産階級文化のそれぞれの力が、いかに女性の身体に影響を及ぼしているのかという、現在の歴史社会学やジェンダー論で論じられている諸問題に、女性の頭髪や髪型・清潔観の変遷という切り口を通して、新たな知見を提示したと言える。また日本社会を対象とした歴史社会学的研究の多くは、戦前期を扱うものと戦後期を扱うものに二分される傾向があるが、本研究は高度経済成長期前までとはいえ、両期間をまたいで扱い、かつその両期の断絶と連続性を指摘しているという点で、新たな試みとなっている。その意味で本研究は、当該研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文であると言える。

審査会においては、本研究で用いられる社会学的な分析枠組みをさらに洗練させる必要のある事、それに基づいて記事のカテゴリー分けをより説得的な形で提示すべきこと、主要なテーマである清潔感／観の変化を、現代の観点から再帰的にとらえなおして浮き彫りにする必要のある事などが、課題として指摘された。だがそれらの課題を踏まえた上でも、本審査会は、本研究は野心的で発見に富む優れた研究であり、当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く独創性を備えていると判断した。

以上から本審査会は、本研究は、人間社会学研究科（人間科学専攻）の博士論文審査基準を満たしていると結論した。

む問いを提示した。

第2章では、『婦人衛生雑誌』に掲載された女性の頭髪と髪型に関する記事を分析した。『婦人衛生雑誌』は、衛生思想の普及を目指した啓蒙活動と、家庭の衛生を守る良妻賢母を育む女子教育を担う雑誌であった。初期の読者層は、教育を受け、雑誌の購買力がある上流階級の女性であり、大正期にはそれが看護師となった。

明治維新から国家統一と軍事力強化に取り組んだ明治政府は、富国強兵政策のもと、衛生思想の普及を目指した。女性の頭髪の管理についても、整髪や洗髪だけではなく、髪型にも強く影響を与え、女性の身体に介入した。このような、ミッシュェル・フーコーが「生権力」と呼ぶ国家による力の行使は、『婦人衛生雑誌』の医師による頭髪の疾病に対する対処法や頭髪の管理技術についての啓蒙記事に見ることができる。そこでは不衛生な日本髪が批判され、より簡便な束髪が推奨された。だが他方で、清潔であればどのような髪型をしていてもよいというわけではなかった。女性は日本の伝統を担う者として、男性から評価される美しい黒髪を保つことも求められた。

日清戦争・日露戦争と対外戦争が続き、ナショナリズムが高揚すると、女性の黒髪を賛美する記事が増え、洗髪がしやすく頭髪を衛生的に保つことのできる束髪ではなく、伝統的な日本髪が推奨された。また良妻賢母思想にもとづき、女性に家庭における夫や児童の頭髪の管理を求めるような記事も掲載された。

大正時代になると、初等教育の普及と識字率の上昇、経済発展により、新中産階層が勃興し、都市部では職に就く女性が生まれてきた。これらの女性の間では、より活動しやすい断髪や洋髪が流行し、女性の髪型は日本髷を結う結髪から簡易な束髪へと変化した。それに伴って洗髪習慣も変化した。衛生思想がじょじょに定着し、頭髪の疾病が減少すると、『婦人衛生雑誌』の記事も、これらの髪型に関する記事が増えて行った。

第3章、第4章では、明治後期から昭和初期にかけて『婦人世界』に掲載された頭髪に関する記事と読者相談の内容を検証した。『婦人世界』は新中間層の女性たちを主要な読者とした婦人雑誌であり、とくに大正期には婦人雑誌として日本最大の発行部数を誇っていた。『婦人世界』の記事からは次のことが明らかになった。

明治後期の既婚女性のあいだでは、女性が担う日本の伝統が髪型にも強調され、長く艶やかな黒髪で結う日本髪を維持することが推奨されていた。日本髪を結うことは、伝統的な日本女性の美を担うだけでなく、主婦にとっては良妻賢母としての社会規範を遵守していることを象徴しており、日本女性らしさを強調するものであった。しかし、西洋の近代的な女子教育の影響と、政府が掲げた富国強兵の政策により、母親となる女子の体位・体力向上のため、学校教育に体育が取り入れられた。このことは髪型の流行にも影響し、女生徒の間ではより手入れがしやすく活動がしやすい束髪が普及した。若い女性には、出産・育児にふさわしい丈夫な身体と、それにふさわしい束髪が求められる一方、既婚女性には良妻賢母として日本の伝統を背負い、それにふさわしい日本髪が推奨され、女性には矛盾した状態が内面化された。

大正期に入ると、女生徒時代に束髪を結っていた女性の間では、修了後にも束髪が定着し始めていた。また、資本主義経済の発展によって女性が就くことのできる職業数が増加し、仕事を持つ女性が増加した。これらの職業婦人の間では、より簡潔な手入れでよい洋髪が増え始め、日本髪は正月などの特別な行事のときに結う髪型になっていた。加えて、関東大震災後には、婦人にも動きやすく簡便で質素な束髪や洋髪が推奨された。このように、大正時代には女性の髪型は変化し、インフラストラクチャーの整備が進んだことも合わせ、髪に対する清潔習慣も少しずつ変化した。女性の髪型は、「富国強兵」と「伝統」の護持という、それぞれ異なるベクトルをもつ要因に加え、新興中産階級の新たな流行文化にも影響を受けつつ変化していったのである。

第5章、第6章では、大正期から戦後に渡って『主婦之友』に掲載された頭髪に関する記事の内容を検証し、大正期から戦中期をはさみ、戦後の高度経済成長前までの時代に、当時の代表的なマスメディアが大衆に向けて頭髪をどのように報じ、その記事内容がいかに変遷していったのかを検証し、考察した。

昭和に入り、『婦人世界』にかわって婦人雑誌で最も発行部数の多くなった『主婦之友』は、『婦人世界』よりもより大衆的な女性を読者とした。流行に関する記事や実用記事を多く取り扱い、戦前・戦中・戦後にかけて、多くの女性読者を獲得した。

『主婦之友』では当初、髪形については良妻賢母や日本の伝統を強く謳うのではなく、新たな流行にのっとった洋髪やパーマに関する記事が多く掲載された。この点は、『婦人衛生雑誌』『婦人世界』の大正期の記事と同様の傾向を示している。

しかし、昭和10年代の戦中期に入ると、記事でも戦時色が強調され、銃後髷のような簡易な束髪を推奨する記事が現れた。また、国粋主義的ナショナリズムが盛んになるにつれ、束髪でも「日本女性の長い黒髪」の美しさを保つことが強調された。頭髪の手入れでは、シャンプーが発売されているにも関わらず、記事では布海苔とうどん粉が推奨されていた。洗髪方法に関しても、頭髪を傷めずに、黒く長く真っ直ぐで、多く保つことに重きを置いた方法が紹介された。

終戦後の占領期から高度成長期にさしかかる時期には、女性の参政権が認められ、女性の就労はさらに進み、制服とともに身だしなみにも重点が置かれた。戦前は容易に受け入れられなかった断髪は、ショートカットと呼ばれる流行となり、多くの人々に受け入れられた。また、パーマが流行し、日本髪が日常的に結われることはなくなり、髪形は大きく変化した。

だが戦後の変化は戦中時との断絶ととらえるべきというよりも、大正期から変化していった女性の髪型に対する価値観の変容が、戦中期には抑圧されつつ継続し、戦後それが表面化したと捉えたほうが良いように思われる。戦中期も雑誌では「長い黒髪」の美しさや銃後髷が推奨されたにも関わらず、実際には「代用パーマ」を求める女性は多かった。また髪型と頭髪の管理・洗髪方法が変化するにつれて、「清潔」で「さらっと」した髪を良いとする身体感覚についての記事も現れていた。

この時代に「清潔」とは、明治期の国家が普及させようとした衛生思想にもとづいた疾病

を予防するための状態を指すだけでなく、外観の美しさとも結びついた観念となった。さらにそれだけでなく、油で固められたかつての日本髪にはない、新たな髪に関する身体感覚ともむすびついたものとなっていったと思われる。

初出一覧

序章

本論文が初出

第1章 先行研究の検討

本論文が初出

第2章 黒髪と清潔—明治中期～大正にかけての婦人衛生雑誌から読み解く黒髪の変遷—

横山友子 (2016) 「黒髪と清潔：明治中期～大正にかけての婦人衛生雑誌から読み解く黒髪の変遷」『人間社会学研究集録』11：101-124（査読あり）を加筆・修正

第3章 明治後期～昭和初期にかけての頭髪における記事分析—『婦人世界』から読み解く黒髪の変遷—

横山友子 (2018) 「明治後期～昭和初期にかけての頭髪における記事分析—『婦人世界』から読み解く黒髪の変遷」『人間社会学研究集録』13：171-194（査読あり）を加筆・修正

第4章 『婦人世界』の読者相談から読み解く黒髪の変遷

横山友子 (2019) 「『婦人世界』の読者相談から読み解く黒髪の変遷」『人間社会学研究集録』14：53-74（査読あり）を加筆・修正

第5章 戦前から戦後にかけての頭髪における記事分析—『主婦之友』から読み解く黒髪の変遷—

横山友子 (2020) 「戦前から戦後にかけての頭髪における記事分析—『主婦之友』から読み解く黒髪の変遷—」『人間社会学研究集録』15：93-112（査読あり）を加筆・修正

第6章 戦後から高度成長期に至るまでの頭髪における記事分析—『主婦之友』から読み解く黒髪の変遷—

本論文が初出

終章 まとめと今後の課題

本論文が初出

学位論文審査結果の要旨

本論文について、字数・初出等の論文申請要件を充足していることを確認した。

以下、人間科学専攻の博士論文審査基準（2012年度～2017年度入学生）を参照して結果を述べる。

（1）研究テーマが絞り込まれている。

明治中期から戦後高度経済成長期前までと時代を限定したうえで、女性の頭髪をめぐるメディアの言説の変遷を通して、当時の女性の頭髪と髪型をとらえるという点で、研究テーマははっきりと絞り込まれている。

（2）研究の方法論が明確である。

明治中期から戦後の高度経済成長期前までにかけての、頭髪に関する記事を扱っており、なおかつその時代にもっとも発行部数が多い婦人向け雑誌に掲載された記事のテキスト分析を行っているという点で、方法はきわめて明確である。

（3）研究テーマについての先行研究の調査を十分に行っている。

本研究が先行研究として参照しているのは、近代国家における生権力と衛生思想の普及に関する研究、ナショナリズム論、大正期における新興中産階級の文化と女性に課せられたジェンダー規範の研究、日本における女性の頭髪と髪型の研究、そして雑誌記事分析研究である。本研究は、これらの分野の先行研究を十分に調査し、検討している。

（4）研究の素材となる基礎文献、資料、調査データを十分に吟味している。

本研究は、分析の対象とする3つの婦人雑誌を全巻にわたって綿密に調べ、そこから髪型と頭髪に関する記事をもれなく抽出している。さらにそれぞれの時期における雑誌記事を、数量的な観点および内容の観点から分析し、各時期の雑誌記事の言説を形成している国家生権力・ナショナリズム・中産階級文化の影響を浮き彫りにしている。ここから、本研究がこれらの資料を十分に吟味していることは明らかである。

（5）研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している。

近代日本における女性の頭髪と髪型の変遷に関する研究は少ない。さらに本研究のように、女性の頭髪や髪型、清潔観の変遷を、雑誌の記事分析から、国家生権力・ナショナリズム・中産階級文化の影響の交錯する場所として読み解く試みは、まったく前例のないものである。このように本研究は、テーマへのアプローチ法がきわめて独創的であり、明治中期から戦後高度経済成長期前までの女性の頭髪と髪型・清潔観の変遷に、これらの力がどのように働いたのかを明らかにした点で、新しい知見を打ち出していると言える。

(6) これらの新しい知見を裏付けるための必要にして十分な議論と実証がなされている。

雑誌記事の数量的分析および内容分析は、論理的で説得的である。知見を裏付けるための必要にして十分な議論と実証がなされていると言える。

(7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。

本研究は、近代日本における国家の生権力・ナショナリズム・新興中産階級文化のそれぞれの力が、いかに女性の身体に影響を及ぼしているのかという、現在の歴史社会学やジェンダー論で論じられている諸問題に、女性の頭髪や髪型・清潔観の変遷という切り口を通して、新たな知見を提示したと言える。また日本社会を対象とした歴史社会学的研究の多くは、戦前期を扱うものと戦後期を扱うものに二分される傾向があるが、本研究は高度経済成長期前までとはいえ、両期間をまたいで扱い、かつその両期の断絶と連続性を指摘しているという点で、新たな試みとなっている。その意味で本研究は、当該研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文であると言える。

審査会においては、本研究で用いられる社会学的な分析枠組みをさらに洗練させる必要のある事、それに基づいて記事のカテゴリー分けをより説得的な形で提示すべきこと、主要なテーマである清潔感／観の変化を、現代の観点から再帰的にとらえなおして浮き彫りにする必要のある事などが、課題として指摘された。だがそれらの課題を踏まえた上でも、本審査会は、本研究は野心的で発見に富む優れた研究であり、当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く独創性を備えていると判断した。

以上から本審査会は、本研究は、人間社会学研究科（人間科学専攻）の博士論文審査基準を満たしていると結論した。